
ほしぞら

ひなた そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほしぞら

【Nコード】

N6331K

【作者名】

ひなた そら

【あらすじ】

“翠”と付き合って3年。

遊び人の“王子”の正体が翠だと気付いてしまった瑞穂は、別れを切り出す。

大学を卒業し就職して半年。

傷心の瑞穂の隣にはいつも翠の友人正大がいた。

瑞穂はまだ心の奥底に存在する翠と、ずっと支えてくれていた正大との間で切なく揺れる。

手離して初めてわかる想い。

手離したくない想い。

忘れられない想い。

“王子” 翠は何を想う？

王子の正体

切なくて、苦しくて、涙が出る。

ただ彼に逢いたくても、彼女は彼のマンションへと急いだ。

約束はしていない。

もしかすると彼はまたいないかもしれない。

けれども彼女は急いだ。

コートのポケットに手を入れ、彼との繋がりをぎゅっと握り締める。

もうすぐ。もうすぐ彼のマンションが見える。

自然と頬が緩む。

彼に逢いたい。

逢ったら言おう。

大好きって伝えよう。

きっと彼は微笑んでくれるから。

「俺も」

って言ってくれるから。

彼女は彼との繋がりをポケットから取り出した。

ちやりと二つの繋がりが音を奏でる。

彼との隔たりがかしやりと開かれた。

開かれた隔たりの向こう側は暗闇。

やっぱり今日も逢えない。

逢いたいときに、あなたはいない。

「ね、瑞穂…あんたまだ王子と付き合ってたの？」

花壇の横に設置されたベンチで本を読んでいた片山瑞穂は、友人の
リサに声をかけられ、きょとんと首を傾げる。

「王子？」

「…小暮翠よ」

「翠が王子？ 何それ」

瑞穂は声をあげて笑う。

確かに翠はキレイだけど、王子は言い過ぎではないだろうか。

そういえばここ1年くらい間に、周りからやたらと“王子”の話題を耳にしたなと思いつく。

「どここの誰だれが王子と寝た」とか、

「遊びでもいいから王子に抱かれたい」とか。

王子の正体など全く興味のなかった瑞穂は、ただ漠然と、その他大勢は嫌だな、と思っていた。

たった一人に愛されるのもこんなに大変だということにと心の中で苦笑いしていたのだから。

そっか。翠が「王子」だったんだ…。

あたしはいつの間にか翠の「その他大勢」になってたんだ。だからこんなにも不安だったんだ。

翠が週末になると甘い香水の香りを纏って帰宅することも、

日によっては家にも戻ってこないことも、

不安でたまらなかった。

誰にでも優しく、誰にでも甘く声をかける翠。

心配そうに見つめるリサに少し微笑んで、また本に視線を落とした。不思議と涙は出ない。

もしかすると頭のどこかでわかっていたからなのかもしれないと冷

静に自己分析する。

リサが去って行って、ちょっとホッとしたとき、芝生の向こう側に翠と翠の友達の正大が歩いているのを見つけた。翠は瑞穂に気がついたらしく、微笑んでいる。瑞穂は少し考えて、ぎこちなく笑みを返した。

気付かなきゃよかった。

3年も付き合っていたつもりだったけど、ただの女友達だったんだ。..
ってどうかセフレ？

考えただけで悲しくなる。

ねえ、翠。

あなたは覚えてる？

あたしたち、明日は3回目の記念日なんだよ？

講義を終え、講堂から出ようとした瑞穂は、机に腰掛けて談笑していた翠に声をかけられた。

一緒にいたリサが気を利かせて「先に行ってるね」と瑞穂の肩をぽんと叩き、笑顔で去っていく。

リサが離れていくのを確認し、翠はするりと瑞穂の腰に腕を回し向き合う。

「卒論、みんなでやつつけようってことになったんだ」

「…そうなんだ」

「今週は無理だけど、来週は開けておくから」

翠はにこりと微笑む。

瑞穂はなんとか笑顔を作り、そつと翠の腕から逃れた。

「どうかした？」

不思議そうに首を傾げる翠に少し笑いかけ、レポートがあるからと講堂から出て行く。

広い廊下を歩きながら瑞穂は翠の笑顔を頭から追い払おうと頭を振った。

卒論なんて嘘ばかり。

朝からずつと、王子が合コンに参加するというニュースで持ちきりなのに。

あたしはいつまで騙されてあげればいい？

そしたら翠と一緒にいられる？

友人の忠告 翠ver.

「相変わらず嫌味なほどモテるねえ、王子は」

「何それ？」

「知らないの？ おまえの妙名。A大の王子って呼ばれてるぞ？」

「へえ。王子ってのはなんか違うけど、ま、気分はいいよ」

「嫌なヤツ。おまえ、彼女いるんじゃないか？」

友人の正大が眉を寄せてそう口にする、翠はにこりと笑う。

「いるよ。すげーかわいくて、すげー優しい子」

「だったらいい加減女遊びやめたら？」

友人の忠告に、彼はぴくりと眉を上げた。

「何で知ってる？」

「有名だよ。教育課の絵美ちゃんだろ？ それに経営課の結ちゃん、

IT課の美紀ちゃん。隣のG大の加奈ちゃんに……」

「ああ……もういい」

彼はうんざりした表情をして友人の口を手で制す。

「こんな浮気症の彼氏を持って、何にも言わないわけ？」

「ばれないようにやってるし。俺、彼女にベタ惚れだし」

「言ってることとやってることが全く違うってこと、気付いてるか？」

「うん。大学卒業したら女遊びも卒業するよ。どうせ俺に寄ってくる女なんて俺の外見目当てだし。あ、体もか。」

「…かわいそうな彼女だな…」

「そうか？ 俺、自分の女は大事にしてるけど」

翠はそう言っただけでちらりと花壇を見た。

そこには静かに本を読んでいる瑞穂がいた。

ふいに顔を上げた瑞穂と目が合う。

瑞穂は微笑み、また本に視線を落とした。

翠は愛しい彼女から視線を逸らし、正大に向けて笑顔を見せる。

「心配ないよ。俺、就職して落ち着いたら結婚するつもりだし」

「……捨てられるなよ？ おまえみたいな女癖悪い男、俺なら絶対嫌だから」

「大丈夫だよ。だてに3年も付き合っただけで」

翠はそう言って、少年のような笑顔を向けた。

そうだ。確かそろそろ3年目だった。

婚約指輪、用意しておこう。

そろそろ合コンも止め時だな

翠はバレる前に退いておこうとこっさり思った。

別れの決意 瑞穂ver.

瑞穂は暗い部屋でひとりポツンとソファに座っていた。

この部屋の主はまだ帰ってこない。

今ごろキレイな女の子と…

そう考えて、小さくため息をついた。

今日は翠と付き合って3年目の記念日。

きつと翠はもう忘れてしまったのだろう。

だから合コンにだって参加したのだろうと、わかってはいても、納得したくない自分がいた。

1年目の記念日は、ネックレスをもらった。

しゃらりと胸で繊細なチェーンが揺れる。

このネックレスを買うために、翠はバイトをがんばったんだと恥ずかしそうに言っていた。

2年目の記念日は、指輪。

ネックレスとお揃いのデザインのプラチナリング。

いつの間にサイズを測ったのかとビックリするほど瑞穂の指にピッタリとはまった。

ふっと笑みが零れる。

翠は優しい。

女の子が喜ぶポイントを熟知している。

他の子たちが翠に夢中になるのも納得だ。

話題は豊富だし、何よりモデルかと思うほど容姿がいい。

こんな人の彼女が自分だなんて、ずっと信じられなかった。

けれど、まさか本当に彼女ではなかったなんて…。

抱えた膝の上にはぱたりと涙がひとつづつ落ちた。
ぎゅっと瞼を膝に押し当てる。

それでもどんだん涙が溢れてきて、ついに嗚咽が漏れた。

こんなに好きになってしまつて。

翠の手のひらも声も腕もみんな覚えてるのに。

一番大切なことがどうしても思い出せない。

翠の気持ちかわからない。

愛されたという記憶が見つからない。

瑞穂は泣いた。

体中の水分が全部枯れ果てるまで泣いた。

どうして翠は他の子を見るの？

どうして翠は他の子を愛すの？

どうして…

翠…

夜が明けて、瑞穂はゆるりと立ち上がった。

出直そう。

そして、今度こそ別れを告げようと決意した。

最後の合コン 翠ver.

「いやーん。翠くんってばあ」

女は慣れた手つきで翠の腕にするりと巻きつく。

翠はにこりと微笑み頭を撫でてやった。

トロンとした目になる女に微笑みかけ、翠はぐるりと周りに視線を移す。

右には翠にしな垂れかかる女、

左には完全にターゲットを奪われ自棄酒に切り替わった女、

一緒に合コンに参加した友人達もどうやらうまくいきそうだ。

そう判断した翠は、右にいる女の肩にそっと触れた。

「出ようか？」

「んー…いいのあ？ まだ誰も抜けてないよ？」

女は期待に満ちた瞳で見上げてくる。

すっかりその気のクセにと翠はこっそり笑う。

「いいんじゃない？ みんな楽しそうだし」

「そうだねえ。じゃあ出よう？」

女はいそいそと身支度し、翠に腕を絡める。

そのまま二人はここを出た。

どうして繁華街の裏にはホテルが都合よく準備されているんだろうな。

翠は女の速度に合わせるようにゆっくりと歩きながら不思議に思う。

まあ、その方が都合がいいからなのだろうけど、と小さく笑う。

辺り一帯ホテルが連なる場所につき、女の顔を覗き込んで微笑みかける。

「エミちゃん、ホテル、どこがいい？」

「ええー？ どこでもいいよ？ 翠くんといられるなら」

そう？ と翠は手近なホテルに入り、キーを持ってエレベーターに女を乗せた。

「なんかあ、慣れてるよね、やっぱり」

拗ねたような女に翠はわざと困った顔を見せる。

「ダメ？ だからこそエミちゃんを喜ばしてやれると思っけど？」

「いやーん！ 翠くん、エッチ！」

何気なくされるボディータッチは女が男に馴れていることを予感させる。

翠は部屋を見つけ、キーを開けると女を中にエスコートした。

「シャワー、入りたい？」

「ん…早く、しょ？」

女の腕がするりと翠の体に巻きついた。

「せっかちなだね、エミちゃん。もうしたくなっちゃった？」

くすくす笑うと女は妖艶な笑みを浮かべてキスを強請る。

翠はゆっくりと女をベットに倒した。

さよなら 瑞穂ver.

翠。

そう呼びたくて口を開いたけど、声が出てこない。
情けない…。
もうダメなんだってわかってるのに、まだそれを認めたくないなん
て…。

「翠…」

ようやく愛しい人の名が呼べた。
でも、こんな気持ちで呼びたくなかった。

「んー？」

瑞穂に背中を向けてごろりとラグに寝転がっていた翠が、テレビに
夢中になっているのか気のない返事をした。
タバコの灰を灰皿に落とし、笑う。
華奢だけどそれなりに筋肉のついた体。
さらりと揺れる漆黒の髪。
口角が上がった唇。
瑞穂はそのひとつひとつを目に焼き付けていく。
決して忘れないように、何度も何度も目に焼き付ける。

翠が振り向いた。

「何？」

きよとんとして瑞穂を見つめている。

「…翠…あたしに何か隠してない？」

瑞穂は祈る。

あの日は合コンなんかじゃなく、本当に卒論制作であってほしい。王子なんて全くの別人で、自分だけを愛してくれる翠であってほしい。

翠は顎に手を当てて考え込んでいる。

嘘を付きたいのか、既に忘れているだけなのか。

翠の真意を知りたくて瑞穂は翠をじっと見つめた。

こんなの自分らしくない、と瑞穂は小さくため息をつき、抱えていた膝に頭を乗せた。

「どうした？」

翠は心配そうに体を起こし、瑞穂の顔を覗き込む。

瑞穂はそつと瞳を閉じた。

これから告げる言葉をもう一人の自分が必死で留まらせようとしている。

こんなに優しいじゃない。何が不満なの？

どこが優しいの？ 誰にでもそうじゃない。

その他大勢でもいいじゃない。こうして傍にいられるのだから。

愛されないのに傍にいて嬉しいの？

自問自答を何度も繰り返す。

翠は黙り込んだ瑞穂がじれったくなってきたのか、瑞穂の前髪をそつとかきあげて額に唇を落とした。
ドクンと瑞穂の胸が鳴る。

こうして他の誰かにもキスをしたのね。
その手で誰かを抱いたのね。

「…翠の彼女って、今何人いるの？」

「はあ？」

シラを切るのはあたしが好きだから？
それともわざわざ言う必要もないから？
面倒だから？

「翠、あたしを振って？」

翠の声が聞こえない。
何か言ってるのに、何も耳に入ってこない。

「言い出し辛いならあたしが言っただけよ。翠、あたしと別れて？」

もう翠には会わない。
連絡もしない。
これが最後だよ、翠。

瑞穂はテーブルの上に置いてあった自分の携帯を真っ二つに折った。
そのまま玄関に行き、キーケースから翠の家の鍵を外し、シューズ

ボックスの上にそつと置く。

さよなら、翠。

愛す気持ちを教えてくれてありがとう。
翠は自由が似合ってる。

別れ 翠ver.

翠は瑞穂の背中を追いかけることができなかった。

いつからバれていたのだろうか？

いつから不安にさせていたのだろうか？

自分の愚かさに腹が立つ。

真っ二つに折られた瑞穂の携帯を拾い上げ、短く息を吐き出す。

瑞穂は今日、どんな思いでここに来たのだろう。

最初から別れを告げるためにここへきたのだろうか。

ふとサイドボードの上に置かれたカレンダーを見た。

昨日の日付のところにハートマークがつけられている。

「昨日…？」

翠はぼんやりする頭でそのマークの理由を考えた。

「…3年目…」

そろそろだとは思っていたが昨日だったのかと、リビングの脇にかけられた自分のコートのポケットを弄る。

四角い箱を手のひらに乗せ、自虐的に笑う。

この指輪を渡して、プロポーズしようと思っていたのだ。

女遊びもやめて、瑞穂だけのために生きていこうと、

そう思っていた。

もしかして…と翠は寝室のドアを開けた。

ベットの上には一昨日の朝脱ぎ捨てたはずのスウェットがきちんと

たたまれている。

昨日、瑞穂がここに来ていたのだと確信する。

3年目の記念日の夜、翠の帰らないこの部屋で一人、瑞穂は待っていたのではないだろうか？

どんな思いでここにいたのだろうか。

翠はベットに体を投げ出した。

「最低だ…俺…」

翠は腕を顔に乗せ、笑った。

どんなに後悔しても、どんなに謝っても、瑞穂を傷つけた事実は変えられない。

「ごめん、瑞穂…」

翠は震える手で瑞穂の枕を抱きしめた。

ひとりぼっち

もう涙なんか出ないと思っていたのに、次々と溢れてくる。
瑞穂はついに立っていられなくなり、その場にしゃがみこんだ。

翠。

翠。

翠…。

どうしてあたしじゃダメなの？

どうして他の人を愛すの？

どうして？

「あれ？ 翠の彼女？」

ふいに声をかけられ、瑞穂はつずくまっただままびくりと体を震わせた。

「どうした？ こんなところまで…」

声の主は瑞穂の腕を引き、立ち上がらせてハッとしたように息を漏らした。

「泣いてるの？」

瑞穂はぐいっと涙を拭き、顔を上げた。

「正大くん…だっけ…？ ごめん。変なところ見られちゃったね」

瑞穂は苦笑ってスカートを払った。

「何かあったのか？」

正大は声を低くして呟く。

瑞穂は慌てて首を振り、ぎこちなく笑った。

「俺んち、すぐそこなんだけど、くる？」

「ううん。帰る。ありがとう」

瑞穂は少し笑って正大に背を向け急いで立ち去ろうとした。

「瑞穂ちゃん！」

正大の声が追いかけてくる。

「そんな顔で帰せないよ。俺んち嫌なら公園でも行かない？」

そう言って瑞穂の手を握り、すぐそこにあつた公園に連れて行った。

「…翠と何かあつたんだな…」

正大は持っていたコンビニの袋から缶コーヒーを取り出し、瑞穂に手渡す。

ありがとうと受け取り、膝の上に缶コーヒーを置いて俯いた。

「ケンカ？」

瑞穂は苦笑って首を振る。

「…別れてきたの…翠と…」

「なんで……って、あれじゃそうなるよな…」

正大も苦笑いを浮かべ、コーヒーを一口飲んだ。

なかなかコーヒーに口をつけない瑞穂の膝からコーヒーを奪い、プルリングを開けてやる。

「で？ 後悔してんの？」

「…後悔はしてない。ただ…翠がいないのが辛いだけ」

こくりとコーヒーを飲み、飲み口をそつと触れながら小さく笑う。

「馬鹿だよ、あたし。決断遅すぎ…」

「…笑いながら泣くなよ」

正大はがしがしと乱暴に瑞穂の頭を撫でた。

「馬鹿なのは翠だよ。瑞穂ちゃんじゃない」

思いも寄らない言葉に涙が零れ落ちる。

「…ごめ…」

瑞穂は手で顔を覆った。

「…一人にして…」

正大はぽんつと瑞穂の頭に手を乗せ、そのまま立ち去った。

翠がない。

もう会えない。

もう…

あたしは ひとりぼっち…

ともだち

「正大くん…もう大丈夫だってば…」

瑞穂は苦笑いして隣を見上げる。

「別に心配だから傍にいるわけじゃないけど？」

正大は売店で買ったパンを齧りながらベンチに浅く座って足を投げ出した。

翠と別れた後、偶然正大に会い泣き顔を見られてからというもの、何かと正大は瑞穂の傍にいる。

「正大くんは翠の友達なんだよ？こんなところ見られたら翠に誤解されちゃうでしょ？」

「瑞穂ちゃんも翠に誤解されたら困るわけ？」

「違うよ。そんな意地悪言わないでよ…」

「俺は別に誤解されてもいいよ。あいつが悪いんだし」

瑞穂は困った顔でほんの少し笑った。

あれから翠はずっと大学を休んでいるらしい。

翠はモテる。

きっと瑞穂が心配しなくても、彼を支えてくれる人はたくさんいるだろう。

まだ翠を想うと胸がちくりと痛むが、きっとそれは長く付き合ってきたせいだと納得させる。

こうして正大と一緒にいるのは嫌ではなかったが、翠以外の男の人

と並ぶのは少し抵抗があった。
瑞穂はちらりと正大を見上げた。

「何？」

「…翠、元気？」

「さあ？」

「さあつて…友達なんでしょ？」

「あいつがどこで誰と何をしていたようと、瑞穂ちゃんが気にするこ
とない」

「別に気にしてるわけじゃ…」

瑞穂が俯くと、正大は小さくため息をついて瑞穂を見る。

「俺が傍にいるの、迷惑？」

「そんなんじゃない」

「翠なんかもうやめとけよ。俺、あいつに何度も忠告したんだ。友
人の忠告を無視して女に捨てられるなんて自業自得だと思わない？」

正大はバサリと言い放つ。

確かにその通りである。

瑞穂は小さく笑った。

「正大くんの言うとおりだよ。でもきつと翠の本当の相手はあたし
じゃなかったんだよ。だから浮気しても平気だったんだ。正大くん
の忠告を無視したわけじゃないと思うよ？」

「…お人好しだね、瑞穂ちゃん。別に俺、翠にどう思われてもシヨ
ックじゃないよ？」

正大はくくつと笑い、パンの袋をゴミ箱に捨てた。

「トモダチなら傍にいてもいいわけ？」

「え？」

「俺と瑞穂ちゃん。トモダチってことで」

「…友達…？」

「そ。どう？ 男友達って、案外役に立つと思うけど」

にこりと笑う正大に瑞穂は曖昧に微笑む。

基本的に翠以外の男は苦手なのだ。

それに、こうして一緒にいるところを見られて誰かに誤解されるのも嫌だった。

噂されて冷やかされるのも辛い。

何と答えればいいのかと悩んでいると正大が笑う。

「そんなに考え込むほどのこと？ 別に付き合ってくれとか言ってるわけじゃないんだからさ。トモダチなら軽く付き合えるんじゃないの？」

「…そっか…。うん、わかった」

それから卒業までの間、気がつけばいつも正大が瑞穂の隣にいた。

大切な友達

あの日、翠に別れを告げてから一度も姿を見なかった。

忙しくしているうちにいつか忘れられるだろうかと何度も思った。

目を閉じると翠の優しい笑顔が浮かぶ。

優しい声が聞こえる。

目を開けるとそこに翠はいない。

何度絶望し、何度涙を流したかわからない。

別れても苦しくて。

哀しくて。

翠がない。

その現実だけが辛かった。

大学を卒業し、就職して半年が経った。

仕事は忙しかったが、瑞穂にとって遣り甲斐のある仕事ばかりだ。

退社時間になり、ロッカールームで着替え終えた瑞穂はバッグの中で携帯が光っているのを見て手に取る。

【飲みに行くぞ】

「これだけ？」

瑞穂は携帯を見てくすりと笑う。

翠と別れた日から、正大は何かと理由をつけて瑞穂の隣にいた。

最初こそ、翠と仲が良い正大が傍にいるのが嫌だった瑞穂も、毎日のように一緒に過ごしているうちにそんなことも忘れてしまっていた。

口は悪いがさりげなく優しい部分も持っている。

サバサバしているから友人として付き合いやすいのかもしれない。

正大は瑞穂の前では絶対に翠の名を出さない。

だから一緒にいる時は翠のことを忘れていられた。

それに正大は、いつも新しい発見を瑞穂にさせてくれた。

映画を観るとき、ストーリーばかりに目が行く瑞穂に、サントラの

面白さを教えてくれたり、監督の過去の作品を教えてくれたりと、

今までとは違う楽しみ方を教えてくれたのは正大だ。

意外と言っては失礼だが、正大は様々な分野の知識に長けている。

だから日常の些細なことでも不思議に思ったことは何でも聞いた。

瑞穂はそんな毎日が新鮮で楽しく思っていた。

正大に会う日はいつも、今日はどんなことを教えてもらえるのだろうと密かに期待すらしていた。

瑞穂は正大に返事を送信し、ロッカールームを出た。

1階に着いたところで着信音が鳴った。

「はいー」

『こっちの駅まで出てくれるか?』

「うん。今日はどこ行くの?」

『あー…悪い。ちょっと込み入った事情があつて、会社のヤツも一緒なんだけどいいか?』

「うーん…わかった。15分くらいでそっちに着くから」

電話を切つて、込み入った事情つてなんだろうと首を傾げる。

とりあえず最寄の駅まで行き、電車に乗って正大の会社がある駅に向かった。

「へえ！」

駅前で待っていた正大の同僚が瑞穂を見てにこりと笑った。

「??？」

「かわいいねー！ 俺、武田の同僚の西谷です。よろしくー」

瑞穂はきよとんとして正大を見上げる。

正大は苦笑ってちよいちよいと瑞穂の腕を引いて耳元に顔を寄せた。

「合コン合コンうるせーから、間に合ってるからいいって言ったんだ。そしたら女いるって勘違いしやがった。どんな女だっしてしつこいから連れてきたんだ。悪いな」

「ああ、そういうこと。わかったよ」

瑞穂は正大にちょっと笑って、西谷に頭を下げた。

大切な友達 2

駅前の焼き鳥屋に入った3人はビールを注文した。

カウンター席しか空いてなく、真ん中に座った正大に西谷は暴言を吐いている。

「おまえ、普通女の子が真ん中だろ」

「なんで瑞穂をおまえの隣に座らせてやらなきゃいけないんだよ？」

意味わかんねーと正大は小さく笑う。

適当に注文した焼き鳥が運ばれ、串を取り皿に何本か載せて瑞穂に手渡す。

「ありがとう」

「いっぱい食えよ？ 西谷のオゴリだから」

「なんで俺!？」

「邪魔なんだから仕方ないだろ」

「ひでえ…瑞穂ちゃん、こんなヤツやめといたほうがいいよ?」

西谷が身を乗り出して悲痛に叫ぶ。

別に付き合っているわけではないのだが、そういうことになっているので瑞穂は曖昧に笑った。

西谷がトイレに立ってから瑞穂はつんと正大のスーツの袖を引っ張った。

「何?」

「なんで嘘なんかつく必要があるの?」

「あ？ ああ…合コン、行きたくないし」
「そうなの？ っていうか正太くん、彼女作らないわけ？」
「要らない。瑞穂の子守で精一杯」
「ひど…子守って何よ」
「まんまの意味だけど？」

正太は小さく笑って串に刺さったしし唐を口に入れた。

「こつやって飲みに行けなくなるのは淋しいけど、あたし、もう平気だよ？」
「淋しいんじゃないかよ」
「そりゃ…正太くんに彼女できたら女友達なんて会い辛いじゃない」
「だったらいいだろ。女なんか作らなくなつて」
「そうだけど…いいの？ つまんなくない？」
「別に。ほら、食えよ」

正太はくいつと串で焼き鳥を指した。

西谷が戻ってきて追加のビールを注文すると、今度は正太が席を立った。

「ね、いつから武田と付き合ってたの？」
「え？ うーん…年明けくらいからかな…」
「ふうん。あいつ、会社ですげーモテるのに全然興味示さないんだ。異常だと思ってたけど、瑞穂ちゃん見て納得」
「え？」
「ベタ惚れじゃん、あいつ」

西谷はくくつと笑ってつくねを頬張った。

思わず瑞穂は頬に手を当てる。

そんな風に見えるとは思ってもみないことだった。

もしかすると自分がいつも一緒にいるせいで正大に彼女ができない
のではとこっさり考えていた。

自由でいたい翠がそうだったように、正大にも無理をさせているの
かもしれない。

いつまでも甘えていてはいけない…。

そう思う。

けれど…

もう少しだけ…

もう少しだけ、傍にいてもいいですか？

大切な友達3

結局焼き鳥屋の支払いは西谷と正大が済ませ、駅前で西谷と別れた。

「あたしも出すよ」

「いいって。今日はおごられなさい」

「…じゃあ、ごちそうさま。今度はあたしが出すね」

「期待しとく」

正大はくくつと笑って瑞穂に歩を促す。

「さつき西谷さんにかかわれちゃったよ」

「なんだって?」

「正大くん、会社でモテるのに全然興味ないんだって? あたしがいるからだって言ってた」

「へえ」

「ベタ惚れって思われてるよ?」

「いいじゃん」

「なんか照れちゃったじゃない」

「…あいつ、なかなか鋭いな」

「え?」

「なんでもない。どうする? もう一軒行くか?」

「あ…どうしようかな。飲みすぎた感じがしないでもない」

「なんだよそれ」

正大は小さく笑って瑞穂の腕を引いた。

前からきた自転車が瑞穂の脇を猛スピードですり抜ける。

「どうする？ 明日休みだし、ウチ行つて飲みなおすか？」
「そうだね。あ、あれもうDVD出たかな？」
「あの映画か？ そろそろだったか。レンタル見ていくか？」
「うん！」

正大の家に着き、買ってきたビールを冷蔵庫に入れている瑞穂に訊ねる。

「先、シャワー入つとく？」

「うん。正大くん先でいいよ。着替え、勝手に出していい？」

「どうぞ」

瑞穂はぱたぱたとスリッパを鳴らし、寝室のクローゼットからパジャマ代わりのスウェットを出した。

男女の友情は否定派だった瑞穂だが、正大は別物だった。

瑞穂はときどきレンタルしてきたDVDを見ながらここに泊まっている。

翠と付き合っていたころでは考えられないことだった。

正大もまた、瑞穂が泊まったからといって手を出すようなことはない。

異性として見ていないためか、そういった類の危機感や高揚感を感じずに過ごしていた。

しばらくして正大がシャワーから出てきた。

「先に飲んででもいいけど、DVD、先に見ないでよ？」

「そんなことするかよ」

正大は小さく笑って冷蔵庫から缶ビールを取り出す。

「早く入ってこいよ」

「うん」

瑞穂はバスルームに入っていった。

「…面白かったねー！ やっぱこの監督、好きー」

瑞穂はソファアの背もたれに体を投げ出し、ほうつとため息をついた。

「今上映中のも面白そうだったよな。今度行ってみるか」

「うん！ いつ行く？」

「うーん…明日少し早く起きて行くか？」

「やった！ じゃあ早く寝なきゃねー」

瑞穂は缶ビールを一気に飲み干し、苦い顔をした。

「ぬる…」

正大は声をあげて笑う。

「もう開けるなよ？ 結構飲んでるから」

「わかってるよ」

瑞穂はそう言ってころんとソファアに転がった。

「寝るんならベット行けよ？」

「んー…。いつも悪いから今日はいいいい」

「遠慮すんなって。ほら」

正大に手を引かれ、瑞穂はゆるりと体を起こす。

正大と一緒にいると穏やかな気持ちになる。

ただDVDを観るだけでも、

ただ食事をするだけでも、

いつの間にかこうして一緒にいることが当たり前になっていて、ほんの少し不安になる。

自分は正大の存在に助けられているが、正大はどうなのだろう。

本当は邪魔なのではないか？

「ね…あたしたち、いつまで一緒にいれる？」

「酔ってんの？」

「ううん。正大さんに彼女ができちゃったら、もう一緒にいられないでしょ？」

「だからそんな心配しなくていいって。早く寝ろって」

なかなか立ち上がらない瑞穂の体を抱き上げて立たせる。

「あたしがいるから彼女、作れない？」

「だから女なんか欲しくないんだって」

正大は困ったように笑って瑞穂の頭を撫でる。

「いつできるかわかんねえ俺の女なんか気にすんな」

「…うん…」

瑞穂はちよつと笑って寝室に入っていった。

ベットに潜り込み、ころんと窓側を向く。

カーテンのすき間から月明かりが差し込む。

瑞穂はぼんやりと空を眺めた。

星空の中に浮かぶ月を見上げ頬を緩める。
優しく光を放つ月は正大みたいだと思う。

もしも今、正大がいなかったらどうなっていたのだろうか。

翠を思い出してまだ泣いているのだろうか？

ちゃんと自分の足で立てるのだろうか？

瑞穂はそっとカーテンを閉め、天井を見上げた。

「翠は…太陽みたいだったな…」

まだ心の奥に住んでいる翠を思い浮かべ、瑞穂は目を閉じた。

譲れない想い 正大ver.

正大はソファアを倒し、ごろりと横になり毛布を体にかけた。

瑞穂はまだ、翠のことを忘れていない。

ときどき不安そうな顔をする。

それは自分に向けられた不安ではないことに正大は気付いていた。損な役回りだなと正大は苦笑する。

自分を選んでくれたら絶対に不安になんかせない。

そう思いながらも、正大は自分の気持ちを瑞穂に伝えることはどうしてもできなかった。

瑞穂はきつと、友人としての自分が好きなのだ。

伝えてしまったらもう、友人には戻れない。

そうなるなら瑞穂を護ってやることもできなくなる。

大学時代を含めると、今の関係はもう1年。

それは翠と別れて1年ということになる。

時間はどんどん流れていくのに、瑞穂の時間は止まったままだ。

最初は同情だった。

遊び人の翠と付き合っている気の毒な彼女。

翠に向けられる優しい笑みを見て、翠のやっていることを知らないのだと思っていた。

気がつけば視線は自然と瑞穂を探していた。

道端に蹲って泣いていた瑞穂を偶然見つけたあの日、護ってやらなきゃと思った。

自然と瑞穂の隣にいるようになって瑞穂の笑顔を独り占めしたくなかった。

他の誰にも渡したくないと思った。

まして翠になんか絶対に渡さないと思った。

瑞穂が急に居もしない“彼女”の存在に怯えだしたのは翠のときの不安の名残なのだろうか。

それとも少しは“男”として意識してくれているのだろうか。こんなに傍ににいるのに瑞穂の気持ちかわからない。

でも、まだ言えない。

瑞穂の中から完全に翠が消えるまでは「トモダチ」でいなければならぬ。

「そろそろしんどいんだけどね」

正大は寢室のドアを見つめて小さくぼやいた。

届かない気持ちと 渡せなかったリング 翠ver .

翠は屋上でぼんやりとタバコをふかしていた。

初めての失恋から1年。

内定していた会社に予定通り入社し、仕事もある程度覚えてきた。それなりに遣り甲斐もあり、忙しくはしていたけれど。

どこか面白くない毎日。

翠はからっぽだった。

大学時代は遊ぶ時間のほうが多かったし、合コンも毎週あった。出会いは山ほどあったし、女に困ったことなど一度もなかった。

それに…瑞穂がいたから。

一回くらいバレないだろうと女と寝た。

それが気がつけば瑞穂との時間よりも長い時間を他の女たちと過ごすようになっていた。

瑞穂はきつと、最初から知ってたんだ。

気がつかなかった振りをしていたのだろう。

本当は何よりも大事だった。

一生を共にするのは瑞穂だけだと思ってた。

どうしてあんな馬鹿な真似をしてしまったのだろう。

どうして瑞穂の不安に気付いてやらなかったのだろう。

1年経つてもまだ尚、後悔が消えない。

翠は水の入った灰皿に、もうフィルターだけになってしまったタバコを放った。

「つまんねーよ…」

誰もいない屋上で高い空を見上げてぼつりと呟いた。

「…瑞穂…」

ポケットの中には、あの日渡せなかった指輪が入っている。

伝えたかった気持ちと渡したかった指輪。

どちらも行き場をなくしたまま。

正大の不安

瑞穂と正大は、予定通り、映画館へと出かけた。評判以上におもしろく、二人は満足して映画館を出た。

「昼飯食ってくか？」

「うん。あとでちょっと買い物したいんだけどいい？」

「ああ」

瑞穂は嬉しそうに微笑み、ぐいつと正大の腕を引っ張った。

「あつちにね、おいしいパスタのお店があるの。そこでもいい？」

「パスタか。ホントおまえ、パスタ好きだな」

「うん、大好き」

「じゃあそこにするか」

にこにこ微笑む瑞穂に連れられ、そんなに遠くないカフェに入った。

天気がいいからテラス席がいいと言う瑞穂に従い、案内された席に腰を下ろす。

『夏野菜のクリームソース』と『チキンとなすのトマトソース』で悩む瑞穂に小さく笑い、正大はクリームパスタを選び、瑞穂にトマトソースを選ばせる。

運ばれてきたパスタを取り皿に入れてやると、瑞穂は嬉しそうに目を細めた。

「こついうとこ、ホント優しいよね」

「だろ。お買い得だよ」

「うん、ホント」

にこりと笑う瑞穂に笑顔を向け、正大はこっそり苦笑する。

映画の感想を話しながら食事を終えた瑞穂がトイレに立ち、正大はぼんやりと通りを歩く人の流れを見ていた。

ふとその中の一人と目が合い、どくんと心臓が跳ね上がる。

「翠…」

「やっぱり正大？ 久しぶりだな」

翠はテラスに駆け寄り、笑顔を浮かべた。

正大は心の中で舌打ちする。

瑞穂がここに戻ってきたら翠と鉢合わせだ。

やっと哀しそうな顔を見なくなってきたというのに、ここで二人が会ってしまったら瑞穂はどうなってしまふのだろう。

そう考えていることなど気付くはずもない翠はちらりとテーブルに視線を落とし、にやりと笑った。

「おまえ、女できたんだ？」

「あ…ああ。まあな。おまえは？」

「俺はいないよ。瑞穂に振られてからずっと独り身」

翠は肩を竦めて笑った。

「あ、俺これから得意先に行かなきゃいけないんだった。今度一緒に飲もうぜ？ 俺、携帯変わってないから連絡しろよ？」

翠はそう言って去っていった。

少しして瑞穂が戻ってきた。

「お待たせー」

「あ、ああ。買い物するんだろ？ 行くか」

「うん」

瑞穂はにこりと笑って正大の後を追った。

カフェを出てから正大の様子がおかしいことに気付き、ちよんとTシャツの裾を引く。

「どうした？」

「なんか変。どうしたの？」

「俺？ いや、別に？」

「そう？ なんかさつきから上の空だよ？」

「あー…メシ食ったら眠くなってきただけ」

正大がそう言うのと瑞穂は子供みたいだとくすくす笑う。

ぶらぶらとシヨップを眺めながら歩いてみると、何か発見したらしい瑞穂はキッチングッズが並ぶ店に駆け寄り、ちらりと正大を見上げた。

正大は小さく笑って、入れば？ と促す。

店に入り何やら楽しそうに物色している様子を見て自然と頬が緩む。ふいに翠の顔が浮かんだ。

（翠が独り身…それほど瑞穂が好きだったってことか…）

きつと今の翠なら瑞穂を泣かせたりしないだろう。だが、今さら瑞穂を翠に渡すことなどできない。

ふと瑞穂を見ると、マグカップをふたつ軽く持ち上げて正大を見て
いる。

どっちがいいか迷っているのだろうかと正大は店内に入った。

「迷ってんの？」

「うん。これ、かわいいでしょ？」

「あ？ ああ、まあ」

「おそろいで買っちゃってもいい？」

「おそろい？」

「うん。正大くんの家、マグカップないんだもん」

「ああ、そういえばそうだな。いいよ。俺が買う」

「いいってば。あたしが買いたいの！」

言い出したら聞かない瑞穂の性格を知っている正大は瑞穂の好きな
ようにさせてやろうと引き下がった。

瑞穂は微笑んでからレジに向かった。

マグカップくらいのことであんなに嬉しそうにしている姿を見ると
頬が緩む。

やはり瑞穂の隣は譲れない。

告げられた想い

「夜メシどうする？」

買い物を終え、大切そうにマグカップを抱きしめて微笑んでいる瑞穂に声をかける。

「え？」

「帰るつもりだった？ それ、俺んち置いとくんだろ？」

正大はマグカップが入った紙袋に視線を落とす。

「あ、そっか。でも二日も続けて泊まったら疲れない？」

「俺はいいよ。瑞穂がいたほうが逆に落ち着くし」

「え？」

「俺、すき焼き気分だな、今日」

「なにそれ」

瑞穂はぷつと吹き出し笑う。

「あたしに作らせる気でしょう？」

「バレた？ んじゃない仕方ないから俺も手伝う」

「よろしい！ スーパー寄って帰ろう！」

正大はそつと息を吐き出した。

翠には絶対に渡さない。

もうそろそろ抑えるのも限界に近付いていた。

二人で作ったすき焼きを前に、グラスに注がれたビールの泡を眺める。

「瑞穂」

「んー？」

瑞穂は肉に箸を伸ばし、しまったという顔をした。

「あれ？ この肉俺のだとかじゃなくて？」

「は？ そんなこと言うかよ」

正大は小さく笑ってビールを飲む。

「このタイミングで名前なんて呼ぶからってつきり」

瑞穂はばつの悪い顔で正大の器を持ち上げ、すき焼きをよそった。

「サンキユ」

「で、なあに？」

「あー…いや。いい。なんでもない」

「なにー？ 気になるじゃない」

瑞穂は怪訝な顔で自分の器に春菊を入れようと持ち上げる。

「…おまえさ、まだ翠のこと好きなのか？」

「え？」

「まだ忘れてないのかなと思って」

「…ビックリした…。正大くんから翠の話してくると思わなかった」

「その顔は凶星みたいだな…」

「… 忘れたよ、もう。一年以上経ってるんだよ?」

瑞穂は小さく笑って肉を口に入れる。

「そんな風には見えないけどな」

「なんか今日は意地悪だねー? あたしが忘れてなくても翠はあたしのことなんて忘れてるよ」

「本当にそう思ってる?」

正大はじつと瑞穂を見つめた。

瑞穂はにこりと微笑む。

「だってモテモテの翠だよ? もうとっくに忘れられてるって」

「だったらもういいよな?」

正大は箸を置いて瑞穂を見つめる。

瑞穂もきよとんとしながら箸を置いた。

「瑞穂。俺と付き合わないか?」

突然の告白に瑞穂はぱちぱちと瞬きした。

「え…今なんて…?」

「俺と付き合ってくれ」

「え…だって正大くん…え?」

「俺を選べ、瑞穂」

「ま…って…あたし今ちよっと混乱して…」

瑞穂は視線を左右に流し、髪に手を当てる。

ぐつぐつと鍋が煮える音だけが部屋に響く。

正大は小さく笑って箸を持った。

「考えといて。俺、本気だから」

「…なんで…あたしなの？ 傍に居過ぎたから？」

「俺、瑞穂と翠が別れたの、正直ホツとした。ずっとおまえのこと見てたから」

「うそ…」

「おまえ鈍すぎ。誰が好きでもない女の傍に1年以上もいると思っ
てんだよ」

「友達だからじゃなかったの…？」

「そのポジションも悪くはなかったけど、やっぱり女として傍にいた
いし護ってやりたいと思うだろ」

「でもあたし…」

「ああ、避けるとかナシな。やっと言ったんだから」

正大はカセットコンロの火を止めて微笑む。

「ゆっくり考えて」

食事が終わり、やはり居辛くなったのか、瑞穂は帰っていった。

送ると申し出たが苦く笑って断られた。

少し一人になって考えたいから、と。

少し早まったかと正大は思った。

今までも翠の残像に怯えていたが、今日翠と会ってしまい、余計な
焦りが出た。

この街にいる限り、いつか翠と瑞穂は顔を合わすかもしれない。

未だ瑞穂を想う翠と接触したら、二人は元の鞘に戻ってしまうかもしれない。

そのとき“友人”というポジションでは弱すぎた。

せめて瑞穂と付き合っていれば、翠の元に行かず、留まってくれるかもしれない。

いずれにせよ、もう正大には友人でいられる自信はなかった。

瑞穂を自分の腕に抱きたくて仕方がなかった。

哀しい夜 瑞穂ver.

正大からの突然の告白から1週間が過ぎてしまった。
瑞穂は連絡することができず、一人ぼつんと自分の家にいた。

あの日正大に問われたように、瑞穂はまだ翠を忘れていなかった。
翠の声も手も顔も、みんな鮮明に覚えている。
それと同時に、切なさも苦しさも覚えていた。

一緒にいるのに遠く感じた翠。
背中を向けられるたびに怯えていた日々。

“王子”が翠だと知った時の絶望。
別れた後も続いた哀しさ。
翠がいない現実…。

1年経つても未だ尚、瑞穂の心は悲鳴をあげていた。
けれども、瑞穂の傍にはいつも正大がいてくれた。
正大と一緒にいるときは翠のことを思い出さずにいられた。
安らぎも信頼もあった。

これからも傍にいれたらと思う。
でも…

翠が忘れられない。
そんな気持ちのまま正大の傍にいていいのだろうか。
傷つけてしまわないだろうか…。

瑞穂はベランダに出て空を見上げた。
空には幾つもの星が煌いている。
その真ん中で静かに優しく輝く月。

正大の顔が浮かぶ。

正大は瑞穂を強くしてくれる不思議な力がある。
ただ甘やかせるのではなく、いつ瑞穂が振り向いてもすぐ手が届く
そこで見守ってくれる。
優しい笑顔で。

正大を失いたくない。

けれどもそれが恋なのかはわからない。

翠に恋してたときとまるで違う気持ちのように感じる。

どんなに考えても堂々巡りの闇。

瑞穂は翠を失ったあの日と同じ暗闇の中で彷徨っていた。

揺れる想い 正大ver.

瑞穂からの連絡がないまま1週間が過ぎた。

自分の想いをぶつけてしまって、瑞穂が苦しんでいるのではないかと不安になる。

正大は携帯を開き、アドレス帳を開く。

翠の番号が表示された携帯をじつと見た。

一度翠と向き合わなければならぬとボタンを押す。

何回目かのコールのあと、翠が電話に出た。

「あ、翠？ 俺。武田だけど」

『おー正大？ どうかしたか？』

「今夜空いてるか？」

『19時くらいになるけど』

「ああ。じゃあこないだ会った駅のところでもいいか？」

『了解ー。じゃああとでな』

電話を切り、深くため息をつく。

翠に瑞穂のことを話したほうがいいのか。

それとも瑞穂の存在を黙っていたほうがいいのか。

つくづく自信のない自分に苦笑いが込み上げる。

瑞穂を失いたくない。

ただそれだけだった。

待ち合わせた駅の前に翠が現れた。

近くの居酒屋に行き、ビールで乾杯する。

「今日は彼女、一緒じゃないのか？」

翠に話を振られ、正大は曖昧に笑う。

「どんな女？」

「普通。いや、イイコだよ」

「へえ。付き合い、長いのか？」

「1年くらい、かな」

「そっか…。1年って言ったらまだ大学じゃん。そんな相手、いたっけ？」

「まあな…」

「へえ、正大がねえ。全然気付かなかった」

翠はおいしそうにビールを飲んで微笑む。
ちくりと胸が痛んだ。

「…おまえは？」

「俺？ 言っただじゃん。瑞穂に振られてから女はいないって。最低だよな、俺…。失うまで大事なことに気付かないなんて、さ…」

「おまえならいくらでもほかにいるだろ？」

「いや。もう女はいいんだ。瑞穂が戻ってきてくれるのを待ってる、なんて女々しいかな」

翠は苦笑してそっと視線を落とした。

「瑞穂しかいないんだ、俺。他の誰かじゃダメなんだ」

「…会いたとは思わないのか？」

「思うよ。でもまだダメだな。今の俺じゃ信じてもらえそうもない…」

正大は黙った。

翠のこんな姿は一度も見たことがなかった。
いつも自信満々で、寄ってくる女は食いつぶし、瑞穂の気持ちも考
えない。

そんな翠の姿はどこにも見えない。

翠もまた、自分と同じく瑞穂を想っているのだ。
やっぱり会わなきゃよかったと正大は後悔した。
目の前にいる男は、今でも瑞穂を愛している。
翠は瑞穂を求め、瑞穂は翠を求める。

勝ち目がない…。

それでも、瑞穂を手放せない。
どうしても瑞穂が好きだった。

動き出した歯車 瑞穂ver.

翠と別れ、自宅に戻った正大は、玄関の前で蹲っている瑞穂を見つけ駆け寄った。

「何やってるんだよ!?!」
「…会いにきたの」

瑞穂はゆるりと顔を上げてぎこちなく微笑んだ。

「電話くれればよかったのに…」

正大は鍵を開け、瑞穂を中に入れた。
瑞穂は俯いたままぼつりと口を開く。

「あのね…あたし…正大くんのこと好きだよ。でも、まだ翠が忘れられない…」

「うん」

「そんな気持ちで正大くんとは付き合えないよ…」

「うん…」

「でも、ね。一緒にいたい。ワガママだよ、こんなの…」
「いいよ。瑞穂が笑ってくれるならそれで」

正大はぎゅっと瑞穂の頭を抱えた。
ゆるゆると瑞穂の腕が正大の体に巻かれる。

「いつか、でいいよ。俺を選んで」
「うん…ごめんね…」

じわりと浮かんだ涙を零さないようにぎゅっと目を閉じた。
ズルイのはわかってる。

でも、正大がいらない日々は怖かった。

瑞穂は昼休みにぼんやりと卵焼きを突きながらため息をついた。
平日に正大の家に泊まることはなかったのだが、昨日は帰るに帰れ
なくなつたのだ。

正大は絶対に瑞穂の嫌がることをしない。

こんな曖昧な態度を続けていけば正大が傷つくこともわかってはい
たが、どうしても離れなくなかった。

翠を愛した以上に正大を好きになれたらいいのと思う。

昨夜初めて正大と同じベットで眠った。

緩く抱かれて眠りについた。

思ってた以上にしっかりした体つきは、当然のことながら翠とは違
った。

呼吸も、抱かれた腕も、心音も、翠とは違う。

でも心地よかった。

翠と別れて1年、正大はずっと瑞穂の隣にいたのだ。

異性として意識したことはなかったが、いつの間にか隣にいるのが
当たり前になり、抱いていた気持ちも変化してきたのだろうか。

今ごろ正大も瑞穂と同じお弁当を食べているだろう。

きつと西谷に見られて冷やかされているだろうな。

瑞穂はそう考え、思わず小さく笑った。

「楽しそうだね？」

「あ、志保さん」

「ね、今夜、ちょっと付き合ってくれない？」

「ごはんですか？」
「うーん。飲み会？」
「…合コンなら嫌ですよ？」
「…お願い！ 今夜の面子、すごいよ。絶対行きたいの！」
「他の人誘ってくださいよ…」
「お願い！ 頃合い見て帰ってもいいから。ね？」
「嫌です。ムリです」

瑞穂は必死に拒絶した。

再会 翠ver.

「小暮ー！ 今夜、空いてる？」

同期の浅田啓二あさだ けいじがバシバシと翠の肩を叩きながらにこやかに声をかけてきた。

「何？ 飲みに行くの？」

「おう！」

「メンバーは？」

「同期メンバーの男だけ」

「じゃあ行く」

「よっしゃ。じゃあ19時に下でな！」

上機嫌で去っていく啓二の背中を見て翠は苦笑する。

悪いヤツではないのだが、啓二の誘いはいつも合コンだったため、毎回断ってきたのだ。

翠にとって合コンなんか何の意味も成さない。

瑞穂以外の女と笑顔で話したり付き合ったりなんかできそうもなかった。

仕事もひと段落つき、飲みたい気分だったからちょうどよかったと思っただ。

「で。これは何の真似だ？」

翠は啓二をぎろりと睨みつけた。

「だっておまえ、合コンだったたらこないだろ？ いるだけいいからさ！」

啓二は悪びれた様子もなく、入口で渋っている翠を中に促す。もう既に10分以上は店の外でごねている。

いい加減他の客に迷惑になると言われ、仕方なく店に入った。

「いいか？ 俺、一言もしゃべらないからな？」

翠は冷たい瞳で啓二をじっと見た。

一番出入り口に近い席に座り、面子を見ることもなくメニューに視線を落とす。

誰とも話さなければいいのだ。

いくら話しかけられても、絶対に口を開かないでおこうと決め、メニューを横に置いてタバコに火をつけた。

「小暮さんっておっしゃるんですか？」

翠の隣に座った香水臭い女が馴れ馴れしく腕に触れてくる。

翠は眉を寄せて顔を背けた。

「あー、そいつ、放っておいていいよー？」

啓二はさり気なくフォローを入れ、女たちの目を翠に向けないようにした。

それでも目を引いてしまうのは翠の容貌のせいだ。

結局、翠の隣を陣取っていた女も、会話が一切弾まない翠にさっさ

と見切りをつけたらしく、背を向けて向こうで盛り上がっている。あと30分くらいしたら帰っても問題なさそうだなと思った翠は、目の前のビールを飲み干し、勝手にオーダーした。

ふと、自分の向かいに座っていた女のグラスが目に入り、視線を上げた。

そこに女が座っていたことすら気付かなかったが、飲み物を追加した様子もない。

ここに到着して既に1時間は経っているというのに、目の前から声は一切聞こえなかった。

グラスには並々と茶色の液体が入ったまま。

きつとこいつも無理矢理連れてこられた口だろうと、興味本位で顔を上げてしまった。

「瑞穂…？」

翠はそこにいるはずのない瑞穂を目の前に呆然とした。

再会 そして 別れ 瑞穂ver.

「いやーでーすー!!!」

瑞穂はずるずると引きずられるように居酒屋に連れてこられた。

「いい加減諦めなつて。大丈夫、適当に相槌打ってればいいから」

志保は嫌がる瑞穂を無理矢理個室に入れ、座らせた。

「志保さん…」

瑞穂は泣きそうな顔で救いを求めるが、志保はあつという間に男性陣に囲まれてしまった。

仕方なくウーロン茶を頼み、テーブルの隅でじつと俯いていた。

何人かが瑞穂に声をかけてきたが、会話する気になれず、ずっと俯いていた。

ここにきてすでに1時間ほど経ったが、ウーロン茶を飲む気にさえなれずため息をつく。

早く帰りたいと思い、ちらりと携帯に視線を向ける。

着信どころかメールもこない。

小さくため息をついたとき声が聞こえた。

「瑞穂…?」

思わず顔を上げて驚く。

「す…い…?」

どくんと胸が鳴った。

こんなところで会うなんて思いもしなかった。いることに気がついたらすぐに帰ったのにと、気がつくともバッグを持って立ち上がった。

「あ…あたし、帰る！」

合コンメンバーは驚いて固まっていたが、気にしている余裕など瑞穂にはなかった。

とりあえずお金をテーブルに乗せ、慌てて店から飛び出した。

「瑞穂！」

翠が叫ぶ声が聞こえる。

瑞穂はひたすら走った。

これ以上一緒にいたらダメだと警鐘が鳴る。

「瑞穂！」

お願い、追いかけてこないでと必死で走った。

ヒールでは走りにくく、何度も転びそうになりながらも全力で走る。

「瑞穂っ！」

ついに瑞穂の肩に翠が触れた。

「ま…って…頼む…」

翠は膝に手を当てて呼吸を整えていた。

瑞穂もまた、肩で息をし、咳き込んだ。

「ごめ…俺もキツイ…ちょっと休もう？」

翠の手のひらが瑞穂の背中をそつと撫でた。

それだけで心拍数が一気に上がった。

翠に手を引かれ、すぐ傍の歩行者専用道路に入り、翠は柵に腰掛けて瑞穂を座るように促す。

繋がれたままの手に視線を落とし、瑞穂はぐるぐるといろいろなことを考えていた。

どうして合コンになんか行ったんだろう。

どうして翠がいたんだろう。

どうして追いかけてきたんだろう。

今さら何を話せばいい？

瑞穂はようやく決意して顔を上げた。

「翠が元気そうよかった…」

本当は会いたかった。

会って話したいことがたくさんあった。

「瑞穂…ごめん…。俺…」

「謝らないで？ あたし、もう怒ってないから」

「でも…」

「後悔、してないの」

そう。後悔など一度もしたことはなかった。

本当に好きだった。

離れたくないほど好きだった。
けれど。

「翠と出会ったことも、翠と付き合ったことも、別れたことも、あたし、後悔してない」

瑞穂はそう言っただけを見て微笑んだ。
不思議と心が穏やかだった。

「俺…あれからすごい後悔した。瑞穂の気持ちも考えないであんなことして…許してもらおうなんておこがましいよな…」

繋がれていた手がそつと離れた。
翠を見上げると翠は天を仰いだ。

「瑞穂ー。俺、おまえのこと、すげー好き。この1年、おまえのことばかり考えてた。ずっと会いたかった。ずっと謝りたかった。許してもらいたかったんだ。おまえに…ずっと俺の隣にいて欲しかった…」

翠はそこで言葉を止め、大きく息を吐いた。

「…行つて？ 俺、これ以上情けないとこ、瑞穂に見られたくない…」

翠の声が震えていた。
泣いてるの？

「俺、もう瑞穂に背中、向けたくないから。だからもう行つて…」

手のひらを額に当て、震える手で瑞穂の肩が押された。

翠…どうしてそんな顔するの？

どうして泣くの？

どうして…？

瑞穂は何度も振り返り、手のひらをぎゅっと握り締めて走り去った。翠の傍にいいのは自分ではないと言い聞かせながら。

再会 そして 別れ 翠ver .

翠は夜空を見上げた。

「後悔はしてない」

それはどんな言葉よりも重く感じた。

どれほど馬鹿なことをしてきたか、自身でもわかっていた。

瑞穂を失うことがどれほど苦しいことなのか、失うまで気付かなかった。

だからきちんと謝りたかった。

謝って、もう一度瑞穂と一緒に歩きたかった。

けれど、瑞穂にとってそれはもう過去のことになってしまった。今さらながらに自分の浅はかさに呆れる。

「翠と出会ったことも、翠と付き合ったことも、別れたことも、あ
たし、後悔してない」

そう言って微笑んだ瑞穂。

繋いでいた手を離れた瞬間、手のひらに感じていた瑞穂の温もりが
消えた。

小さく震えるその手をじっと見ているとグツと息が詰まる。
俯いていたら泣きそうだった。

翠は天を仰いだ。

瑞穂がいなくなった右側に悲しいほど冷たい風が吹いている。

俺は馬鹿だ。

瑞穂、ごめんな？

いっぱい苦しめてごめん。

いっぱい泣かせてごめん。

もう一度…なんて、おこがましいよな。

どれほどおまえを傷つけたのかわかってなかった。

ごめんな、瑞穂。

本当にごめん…

「翠くん。昨日のアレ、どういうことなのかなあ？」

啓二はニヤニヤしながら屋上でタバコを吸っていた翠の肩に腕を乗せる。

翠は小さく笑ってなんでもないと答えた。

「追いかけていったあの子、知り合いだったのか？」

「ああ。ちよつと、ね」

「ふうん？ モテるくせに女に興味がない翠くんが珍しい行動するからさー」

「別に。帰る口実が欲しかっただけ」

「へえー？ その割には暗いんですけどー？」

啓二は相変わらずニヤニヤしながら翠の顔を覗き込み、頬を引きつらせた。

「…おまえ…」

「なんだよ…見んな…」

翠は苦笑いを浮かべて灰皿に吸殻を捨てた。

「仕事、先戻ってるからなー」

うまく笑えただろうかと翠は思う。

できるはずなんかない。

こうして立っているだけでやっとなのだから。

息が苦しい。

ダレカ タスケテ

胸が痛い。

ダレカ タスケテ

心が痛いよ…翠…翠…助けて

涙が次々と溢れてくる。

息が続かない。

翠…ごめんね、翠…

傷つけてごめん…

翠…助けてあげられなくてごめん…

ボタンと乱暴にドアを開け、ベットに倒れこむ。

翠、ごめんね

翠、ごめんね

弱いあたしでごめんね

苦しめてごめんね

傍にいてあげられなくてごめんね

翠…

翠…

助けて

息ができない

翠

苦しい

翠

哀しい

助けて…

助けて…

助けて…

もう、ダメ

溺れる…

カナシイ

クルシイ

タスケテ

正太くん…助けて…

就業時間を知らせるベルが鳴り、フロアがざわめく。

トンとデスクを叩かれ顔を上げると、苦笑いする啓二が立っていた。

「なんだよ？ 俺残業だから」

ふいと視線を逸らし、資料を見ながらキーを打つ。

「なあ。おまえ、大丈夫か？」

「何が」

「その…アレだよ…」

「どれだよ」

翠は小さく笑って啓二を見上げた。

「心配すんなって。大丈夫だから」

「でもおまえ…女避けるのってあの子が原因なんじゃねえの？」

「…違うよ。女はもう散々食ったから腹いっぱい」

口角を上げると啓二はいくらかホツとしたような顔をした。

「嫌味なヤツだな」

「そりゃどうも」

翠は手のひらで啓二を追い払い、ため息をついた。

苦しんでも、悲しくても、息ができなくても、

あの時瑞穂が味わった辛さに比べたらたいしたことない。
それだけのことを瑞穂にしたのだから。

今はただ、瑞穂のことを忘れたかった。

「翠」と呼ぶ声も、

はにかむように笑う顔も、

怒ったように見上げる瞳も、

そっと触れるように繋いだ手も、

強く抱いたら壊れてしまいそうな体も、

全部……。

「瑞穂……」

瑞穂が欲しい。

瑞穂がいない。

瑞穂……

翠は顔を覆った。

本当に終わってしまった。

瑞穂はもう、二度と微笑んでくれない。

もう、二度と会えないんだ……。

瑞穂……助けて。

俺を、助けて。

揺れる心 揺るがない気持ち 瑞穂ver.

瑞穂はカフェで待っていた。

アイステイーが入ったグラスの氷がカランと崩れる。

苦しい。

でも、伝えなければならない。

ずっと傍にいてくれたから。

ずっと支えてくれたから。

ずっと想ってくれたから。

お願い。

早くきて。

決心が鈍ってしまわないうちに。

お願い。

自動ドアが開き、正大が笑顔を浮かべて片手を上げている。
瑞穂も微笑んだ。

「どうした？ 急に」

「ごめんね。仕事、大丈夫？」

「ああ。すぐ戻らないといけないけどな」

正大は苦笑って瑞穂の前に座る。

コーヒーを注文し、瑞穂を見た。

「で？ 何かあったのか？」

「うん……。翠に、会ったの……」

「そう……か……」

「もう一度、お別れしてきた」

「そうか…」

正大の苦笑いに瑞穂は俯いた。
何から言えばいいのだろう。

「で？ 俺に話があるんじゃないの？」

「うん…。あたし…この街を出ようと思ってるの」

「…なんで？」

「ここにいたら、正大くんに甘えちゃう」

「いいんじゃないの？ 俺は迷惑だなんて思ってるない」

「けど…」

「瑞穂。俺、おまえが好きだよ。おまえが翠を忘れられないなら、それでもいい。1年も待ったんだ。あと2、3年は待てるよ。けどな。俺の前からいなくなるのだけは勘弁してくれ」

瑞穂の言葉をたたみかけ、正大は痛々しいほど苦笑いを浮かべる。

瑞穂は黙って俯いた。

このままだと本当に正大の優しさを利用してしまふような気がした。
大切な人だからこそ、そうしてはいけなと思う。
どうしたらこの気持ち伝わるのだろうと唇を噛んだ。

「悪い。俺、そろそろ行かなきゃ…。ちゃんとゆっくり話そう？

俺んちで待ってて」

正大はキーケースから自宅の鍵を外し、テーブルにそっとのせた。
そのままカウンターに行き、コーヒを断って支払いを済ませる。
出て行く正大の姿を見送ることしかできなかった。

哀しいキス 正大ver .

正大は重い足取りで自宅の玄関を開けた。

「おかえり」

「ただいま」

ぎこちなく微笑む瑞穂に少し笑いかけ、ネクタイを緩めながらソファに腰を下ろした。

「正大くん……」

「……なあ、瑞穂。おまえにとって俺って何？」

「大切な、人、だよ」

「それは翠よりも？」

「翠、は、大切な思い出、だよ」

「……翠は何だった？」

「……泣いてた。ごめんって……」

「そう、か……」

「あたし、苦しい。翠を拒んで、傷つけて、正大くんを頼って、甘えて、何やってるんだらうって……」

瑞穂は俯く。

「あたしはきつと、翠を忘れない。何度出会っても、何度別れても、きつと、ずっと、翠を忘れない」

「……俺も、瑞穂を忘れない。何度出会っても、きつと何度もおまえを想うよ」

「あたしはズルイ。正大くんに想ってもらおう資格はない……」

「瑞穂。俺を選べ。俺はおまえを離さない」

真っ直ぐな正大の瞳が瑞穂を射る。
瑞穂も真っ直ぐ正大を見つめた。

「ちゃんと、正大くんのことだけを想ってくれる子を、見つけて？」
「俺は！」

言って、正大は口を噤んだ。

もう、ダメだ。

もう、限界だった。

「瑞穂」

緩く顔を上げた瑞穂を抱き寄せ噛み付くようにキスをした。

「や…なんで…？」

瑞穂は唇を離し正大の胸を押した。

正大は答えることなく再びキスをした。

「や…だ…まさ…ひろくん…っ！」

「なんで？」

薄く笑う正大に瑞穂は悲しげに瞳を揺らした。

「抱かせてよ。1年も待ったんだから」

瑞穂の首筋に唇を寄せ、吸い上げる。

「やだっ！」

瑞穂はドンツと正大の体を押した。

「どうして？　なんで急に？」

潤んだ瞳は抗議の色をしている。

「急にじゃないよ。ここまで我慢してきたこと、気付いてないわけじゃないよね？」

「だからっていきなりこんなの酷いよ……」

「酷いのはどっち？」

正大の言葉に瑞穂の頬が引きつる。

「瑞穂。もう一度聞くと、翠のこと、諦めたんだよな？」

「正大くん……」

「ちゃんと見えよ！　おまえのその曖昧な態度がどれほど俺を苦しめてると思うっ！？」

「うめ……っ」

「謝ってんじゃないっ！　俺はおまえの何なんだよっ！」

正大はドンツと壁を拳で叩いた。

びくつと体を強張らせ、瑞穂はかたかたと震えた。

「最後だからちゃんと見えよ。おまえの本当の気持ち……これ以上俺を最低な男にしないでくれ……」

「あ……たし……ごめんなさい……」

瑞穂の瞳から大きな涙の粒が落ちた。

正大はふつと微笑んで瑞穂に手を伸ばす。
びくつと体を震わせる瑞穂に小さく笑った。

「これが最後。ごめんな、瑞穂」

正大はゆっくりと瑞穂の体を抱きしめた。

「ごめんね…正太くん…甘えてばかりでごめんなさい…」

嗚咽交じりで泣きながら告げる瑞穂に正大は最後のキスをした。

『ありがとう、瑞穂。少しは俺、おまえを支えてやれたかな』

何度も振り返り去っていく瑞穂の姿を窓からそっと見送る。
視界がぼやけ、苦笑する。

「男のくせに泣くなっつーの…」
誰もいない部屋に一人蹲る。

泣かせたくないと思っていたのに…

あんなに泣かせてしまった。

きつと誰よりも自分を信じてくれていたはずなのに裏切った。

怖い思いをさせたかったわけじゃない。

ただ、瑞穂が欲しかった。

愛して欲しかったんだ。

「…情けねー…」

そう思っても涙が止まらない。

愛してた。

誰よりも。

一緒にいたかった。
永遠に。

「瑞穂……」

やっと気付いた想い 瑞穂ver.

「で、そんな顔してる理由は何なわけ…」

呆れた顔をしているのは大学時代の友人。

「しっかし、まだ続いてたとはねえ…？」

リサは小さくため息をついて、膝を抱えて座っている瑞穂を見る。

正大の家を飛び出し、もうどうしたらよいのかわからなくなった瑞穂はリサに電話をかけてここまで来た。

「…武田くんじゃダメな理由は何なの？」

「…一緒にいると、甘えちゃうから…」

「1年以上も武田くんに甘えておいて、その理由はちょっと今さらすぎやしないかい？ 瑞穂ちゃん」

「…そう、だけど…あたし、ズルイんだ…。翠と別れて、苦しくて、辛くて、恋しいのに、助けなくて正大くんを思い出した…」

「そりゃこれだけ甘えてきたんだもんねえ。そこで武田くんの顔を思い出さないようじゃ、武田くんも浮かばれないよね」

「……」

「ってかさ？ 何であたしに連絡してきたわけ？ 武田くんのところに行きなさいって言って欲しかった？」

「違う！」

「あんだ、ちよつと卑怯すぎない？ 王子と再会して心が揺れて、別れてきて、だから武田くんとはもう居られないなんてさ、悲劇のヒロインぶってんじゃないの？」

リサに言われ、瑞穂は唇を噛んで俯いた。
そうじゃない、とは言えない。

一人になって苦しまないとだめなのだと自分に言い聞かせた。
正大を頼ってばかりではいけないのだと何度も言い聞かせた。
あんなに優しい人に、あそこまでさせてしまった。

それが何よりも哀しく、辛かった。
もつと罵倒されたほうがよかった。

あんなに苦しい顔をさせてしまった。

「失恋くらいじゃ人は死なないのよ。死ねないの。瑞穂にとって翠くんは理想の王子様だったんじゃないの？ その翠くんとダメになつて、そりゃ絶望もするし、苦しいでしょうよ。再会しても心が揺れるでしょうね、初恋だったんだから。じゃあ武田くんは瑞穂の何？ 友達？ 恋人？ 武田くんと別れる必要があつたとは、あたしは思わない。あんたの人生だから、あんたが思うようにすればいいけど、そんな程度の理由じゃ、武田くんは納得しないんじゃないの？ 好きな女がすぐ手の届くところにいるのに手も出さないでじつと待つてたのよ？ あんたが、瑞穂が、一人で立ち上がるのを。ずっと待つてたの。それが何？ 翠くんと再会して、心が折れて、別れてきたけどもう一緒にはいられない、なんて」

リサは言いたいだけ言つて、瑞穂の頭を撫でた。

「あなた、ホントは武田くんのが好きなんじゃないの？ だからそんな酷い顔してるんですよ」

「リサ…ごめん…」

「ごめんじゃないわよ。馬鹿ねえ…この子は…」

よしよしと頭を撫で、そつと抱き寄せる。

ぼろぼろと涙を零しリサの肩に頭を寄せる瑞穂にリサは呆れたよ

うに笑う。

「今日は泊めてあげる。しっかり頭休ませて、もう一度ちゃんと考えなさい」

リサの言葉にコクコクと頷き、瑞穂は泣いた。頭がもう、何も考えられなくなっていた。

おせつかいは失恋の味 リサver .

泣き疲れて眠ってしまった瑞穂に毛布をかけ、リサは瑞穂のバッグから携帯を取り出した。

「ごめんね、瑞穂。勝手に使わせてもらっね」

リサはそう呟いてからアドレス帳を開き、目当ての人物を探す。サ行に翠の名前はない。

ちゃんと前に進めてるんじゃないの…と苦笑う。

アドレス帳を進め、正大の名前を見つけて自分の携帯に番号を入れた。

「おせつかいは柄じゃないんだけどねえ？」

リサは苦笑しながら通話ボタンを押した。

この迷子ちゃんを引き取ってもらわなければならない。用件を伝え、電話を切るとリサはため息を漏らした。

「1年かあ…。なんつーか、ムカツクわ…」

リサは正大のことが好きだった。

大学時代からずっと密かに想っていた。

きっと正大も、瑞穂も、気付いてないだろうと思う。

別に意識はしていなかったが、報われないこの恋がここまで長く続くとは思ってもみなかった。

それなのによくもまあ、瑞穂と友達でいられたなと苦笑する。

そして、ああ、そうかと思う。

リサは瑞穂のことも大好きなのだ。

不器用で、真っ直ぐで、意地っ張りのこの迷子ちゃんが、今も昔も大好きだ。

リサは涙の跡が残る瑞穂の頬をツンと突つつく。

「あたしにこんなお節介までさせたんだから、ちゃんとしなさいよね？」

瑞穂が好きだ。

瑞穂を想う正大が好きだ。

だから笑う。

大切な人には、やっぱり笑顔でいてもらいたいから…。

「くそう…。今度いい男紹介してもらわなきゃ」

前へ… 瑞穂ver.

リサの家で目覚めた瑞穂は、リサを起こさないようにそっとバスルームに向かった。

鏡に映った自分を見て苦笑いする。

「酷い顔…」

冷たい水で顔を洗い、少しスッキリした気持ちで鏡を見つめた。昨夜、リサに話を聞いてもらって少しラクになったような気がした。翠が好きだという気持ちは未だ心の深いところにはある。

けれどもそれは、以前のようない確信ではないと確信した。ずっと正大がいてくれたから…。

瑞穂が笑っていられるようにしてくれたから…。

それなのに、あんなに追い詰めて、あんなに苦しめて、一体何をやってるのだろうと思った。

一度も自分の気持ちを正大にぶつけなかった。

居心地のいい「友達」というポジションを、「恋」のために失くすのは怖かった。

翠の時のように関係が壊れてしまうのが怖かった。

結局、自分のことしか考えていなかったのだと気付く。

「ごめんね… 正大くん…」

瑞穂はそっと鏡に手を伸ばした。

鏡の中の自分の唇に触れる。

初めてのキス。

最後のキス。

苦しめてごめん。

甘えてばかりでごめんね…。

鏡の中の瑞穂の頬に涙が伝う。

ぐいっと涙を拭い、瑞穂は鏡に向かって微笑みかける。

もう、泣かない。

リビングに戻るとリサが起きていた。

「リサ、ありがと。あたし、帰るね」

「もう大丈夫なの？」

「うん…。一人でちゃんと考える。ありがとね」

「“一人”で抱え込むことが解決にはならないんだからね？ ちやんと考えなよ？」

「わかった」

瑞穂はリサにお礼を言って出て行った。

きつと変わる。

真っ直ぐ前を向いて歩けるように。

正大の隣を歩いても恥ずかしくないように。

いつか、笑顔で会いに行けるように。

逃げないで真っ直ぐ進む勇気を、ありがと。

新しい一步 瑞穂ver.

正大と別れてから半年が経った。

瑞穂はテキパキと仕事をこなしていた。
不思議と落ち込まなくなった。
時々ふと感じるのだ。

正大が笑って見てくれているような気がして、瑞穂も微笑む。

「瑞穂ちゃん、最近何かいいことあった？」

会社の先輩に声をかけられ、瑞穂は微笑む。

いいことはない。
けれど今はがんばれる。

いつか彼に会った時、笑顔でいられるように。

ぶれない気持ちを持ったことが今はただ嬉しかった。

「瑞穂ちゃん！ 今夜なんだけど」

「合コンは嫌ですよ！」

「ええー…ちよつとくらいいいじゃないのよ…」

「ムリです。あたし、好きな人がいるので」

「え！？ そうなの！？」

驚いた顔をしている先輩に笑顔向け、瑞穂はバッグを持った。

「外回り、行ってきます！」

外に出ると随分と暖かくなってきたことに気付く。

もうすぐコートも要らなくなる。

「よし！」

瑞穂は小さく気合を入れて歩き始めた。

4月。

寒い冬が終わって、穏やかな春がやってくる。

浮き足立たないよう、しっかりと一歩一歩踏みしめて歩こう。

得意先を回り、ひと休みしようとして軒のカフェが目にと留まる。

ここは去年の今ごろ、正大と一緒にパスタを食べた店だ。

どっちも食べたくなってメニューを決めかねていた瑞穂に自分の分を取り分けてくれたっけ。

思わず目を細め、カフェに足を向けた。

テラス席に案内され、あのとときと同じ場所に座る。

あの頃はまだ、正大の気持ちも自分の気持ちも知らなかった。

今思うと鈍すぎだと自分でもわかる。

思い出し笑いをしたことに気付き、慌てて手を口に当てて肩を竦めた。

何気なく通りに視線を送ると一人の男と視線が絡み合う。

「…翠…？」

瑞穂に気付いた翠が笑みを浮かべて傍に駆けしてきた。

「久しぶり、瑞穂。元気だったか？」

「うん。翠は？」

「俺？俺はこの通り」

そう言って笑う翠に瑞穂も笑う。

「一人？」

「うん。外回り中なんだけど、ちょっと休憩なの」

「うわ。サボリ？」

「違うよー。休憩だってば」

「そっか。俺も休んじやおうかなー」

瑞穂に確認するように笑う翠に瑞穂は頷いた。

イスに座った翠は眩しそうに目を細め瑞穂を見る。

「キレイになったな。好きなやつでもできた？」

「翠ってば口がうまいねー。さすが王子だね」

「ホントだって。そういえばここ…」

「ん？」

「いや、正大、覚えてる？」

「ま…さひろくん？」

名前を聞いただけで胸が鳴る。

翠は気付かなかったのか笑顔で続けた。

「そ、正大とさ、去年のこのくらいの季節の頃、ここで会ったんだ。女と一緒にだったらいいんだけどさ。あいつ、大学時代から付き合ってたらしいよ」

「そう、なんだ…」

「どんな子？ って聞いたらいイコだって言ってた。あんな顔するの初めて見たよ」

翠はくくつと笑って瑞穂を見た。

「…どうした？」

「ごめん…なんでも、ない…」

「もしかして…さ、それって瑞穂のこと…?」

「ちが…違うよ…」

慌てて笑みを浮かべる瑞穂に翠は表情を曇らせた。

「そっか…あいつだったんだ。瑞穂を支えてたの…」

返事に困っている瑞穂に翠は笑顔を向けた。

「まだ付き合ってたの?」

「…付き合ってたないよ。今も、昔も。支えてもらってばかり」

「……そっか。あいつ、いいヤツだよ」

翠はそう言っただけで微笑んだ。

コーヒーを飲み終えた二人はカフェの前で別れた。

歩き出した瑞穂に翠の声が追いかけてきた。

「瑞穂!」

「なあに?」

「俺、もう大丈夫だから! おまえも、幸せになれよ!」

「ありがとう、翠」

「あいつ、正大、きつとおまえのこと待ってる。後悔だけはするなよ!」

翠は微笑んで、瑞穂に背を向けた。

大好きだった翠の背中。

不安で、苦しくて、切なくて、でも、大好きだった。

瑞穂はただ、翠をずっと見つめていた。

迷わない

会いたい。
今すぐ会いたい。
彼に、逢いたい。

恋は苦しい。
恋は哀しい。
恋は切ない。
恋は、何もかもを壊す。
恋は、新しいものを生み出す。
恋は、幸せなものだと。
彼が教えてくれたから。

あたしは真っ直ぐ彼を想う。
どこにいたって見つけられる。
あなたがあなたでいる限り。

「全く何なわけ？ 突然呼び出して…」
「悪いね」
「…悪いなんて思ってないくせに…」

リサは呆れたようにため息をついて彼を見上げた。

「どうせ子猫ちゃんのことなんでしょ？ あたし、今日デートだったのよ？」

「そっか。うまくいつてるんだ？ 彼氏、優しい？」

「…武田くんに心配されなくても十分優しい人ですよ！ そんな見え見えの口実作らないで心配なら会いに行けばいいのに…」

「まだダメなんだ」

「知らないわよそんなこと…。子猫ちゃんならまだ一人でがんばってるわよ」

「そっか」

「ったくそんな顔するなっつーの！ 意地張ってないでさっさと迎えに行きなさいよね」

「まだダメなんだっつーの」

正大は苦笑いしながらビールを飲む。

心配はしていない。

きつと瑞穂はしっかり前を向いて歩いている。

傍にいらなくても、正大は信じていた。

「全く…なんであたしが子守までしなきゃなんないのよ…」

「リサちゃんだって瑞穂が好きなんだから？」

「お生憎様！。あたし、今彼氏一筋だから！」

「へえ？」

「信じてないでしょ。瑞穂なんかあんなにあげるわ」

「そりゃどうも」

「いつ…迎えに行くの？」

「そうだなあ…。瑞穂が俺に会いたくなったら、かな」

「はっ！ 馬鹿馬鹿しい。あたし、帰るね」

「リサちゃん。ありがとな」

「その言葉は、二人揃って言ってもらいたいわ！」

リサはテーブルにお金を叩きつけて店を出た。

「あ、あたしー。今終わったよ。じゃ、駅前でねー」

電話を切り、店を振り返って微笑む。

ありがとうはこっちの台詞だよ。

あたしの大事な子猫ちゃんをよろしくね。

リサは恋人の待つ駅へと急いだ。

募る想い

今すぐ彼女を抱きしめたい。

もう一人でがんばらなくていい、と。

ここから先は一緒に進もう。

他の誰かじゃダメなんだ。

キミと一緒にじゃなきゃ意味がない。

キミは今、何を見てる？

キミは今、何を想う？

大丈夫だよ。

キミは一人じゃないから。

ずっと支えていく。

だからキミは、

ずっと笑っていて。

会いたい。

瑞穂はぼんやりと月を眺めて彼を想う。

会って伝えたい。

今度こそ正直に、真っ直ぐに。

正大と別れて1年が経った。

もし、正大に好きな人ができていたら…と思う時もあった。

あれだけ優しい人なのだから、彼女ができていてもおかしくない。

その時は、ちゃんと笑顔で言うんだ。

「幸せだね」

翠がそう言ってくれたように。

自分も笑顔で見送ろう。

瑞穂は月を見上げる。

会いたい。

もう、迷わない。

ほしぞら

仕事が終わわり、瑞穂は急いで駅へ向かった。

ちょうどホームに入ってきた電車に飛び乗り、正大の家まで行く。

会いたい。

五つ先の駅が遠く感じる。

早く、早く、と心だけが先走る。

ようやく駅に着き、瑞穂はホームに降りた。

会いたい。

急ぐ気持ちを必死で押さえつけ、改札をくぐる。

もう少し。あと少し。

何度も来た正大の家まで走る。

帰ってきていますように…。

マンションの下に辿り着いた瑞穂は震える手で携帯を開いた。何度もかけたくなつた番号を表示させ、通話ボタンを押した。

コールが鳴る。

1回…2回…3回…

4回目のコールが途切れる。

『瑞穂?』

「正大くん、会いたいよ」

『今、どこ？』

「正大くんの、家…」

『そう…』

言葉を濁す正大の声に不安が押し寄せた。

迷惑だったのかもしれない。

そう思った瞬間、携帯から正大の笑う声が聞こえた。

「え…？」

『面白すぎ、この展開』

「なんで…？」

『もう、会えないかと思った』

「正大くん？」

『待ってて。すぐそっち戻るから』

「え？」

プツリと電話が切れ、もう遅かったのかもしれないと悟る。

2年も宙ぶらりんだったのは自分のせい。

今さら会いたいなんて都合よすぎるよね…。

瑞穂はその場にしゃがみ込んだ。

何やってるのだろうと苦笑する。

でも、声が聞けた。

元気そうだった。

すぐに自分だと気付いてくれた。

嬉しかった。

それだけで十分。

ひとりでも平気。

淋しい。

会いたい。

苦しい。

ごめんね。

いろいろな気持ちがあじり合う。

「何やってんの…」

声が聞こえて顔を上げた。

苦笑いしている正大がそこに立っている。

瑞穂は微笑んだ。

「会いに、きたの」

「うん」

「正大さんに、会いたかったの」

「うん」

「ごめんね。ずっと好きだったの」

「うん」

「今も、好きなの」

「そう。帰ろう、瑞穂」

正大はちよつと笑って瑞穂に手を差し出す。

その手を、取ってもいいの？

まだ好きでいてもいいの？

あたしをまた好きになつてくれるの？

いろんな想いが胸を詰まらせる。

「瑞穂、帰ろう？ ウちに」

「…いいの？ あたし…」

優しく微笑む正大の顔を、もっとちゃんと見たいのに、視界が歪んで見えない。

どうして？

あんなに酷いことしたのに。
どうして許してくれるの？
微笑んでくれるの？
手を、差し伸べてくれるの？

「おかえり、瑞穂」

瑞穂は正大の手をすり抜けて胸に飛び込んだ。

「どうして？」

「言ったる？ 待てるよ、って」

会いたかった。

声が聞きたかった。

触れたかった。

愛されたかった。

必要とされたかった。

守りたかった。

今夜もきれいなほしぞら。

真ん中には優しく輝く月。

静かに、確かに。

「完」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331k/>

ほしぞら

2010年10月8日11時51分発行